国立大学法人 大阪教育大学
大阪教育大学 附属特別支援学校
研究協力者 本多 克敏　岡 真右　大原 健哲　橋本 義久
丹沢 正太　村山 希世　太田 令菜
指導助言者 岩井 俊夫
大内田 裕（本学特別支援教育部門）

# 知的障害特別支援教育における感覚情報を活用した運動学習

Keyword：知的障害教育、運動学習、模倣

## 背景と研究目的

DCDの並存症(ADHD他)が多く在籍する知的障害特別支援教育において児童生徒の動きの変容を目指した「感覚情報」を活用したアプローチによる指導実践を行う。教師の模倣による教示に着目し、生徒の動きの変容に与える効果について分析・検討を試みる。

## 研究方法

微細運動と全身運動の指導実践を2名の生徒を対象に展開する。本研究は本学倫理委員会で研究倫理の承認を得たものである（承認番号：20041）。また、当該児童生徒本人・保護者より研究参加の同意の承諾を得て行っている。実施の手続きは以下のとおりである。

### 微細運動（中学部生徒A）

①一般職業適性検査（器具検査）の記録測定
②20分×7回の指導実践
・独楽の紐を巻く
・ホッチキス操作
・紙を定規で切る
・ティッシュバドミントン
③再度、記録測定

### 全身運動（高等部生徒B）

①50m走のタイム測定
②20分×7回の指導実践
・教師の後ろについて歩行。
・教師の動きを真似する。
・走動作に必要な動きを身体の部分ごとに動かす。
・望ましいフォームの走動作の動画を見ながら生徒が走る。
③再度、記録測定

## 結果

独楽の紐を６回目に巻くことができた。他の課題においても作業の正確性が増したり、ラリーを続けたりすることができた。一般作業能力検査（器具検査）の回数も表１のように増加した。

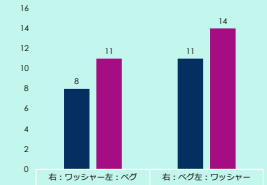


図１ 左右に持ったワッシャーとペグを1分30秒間に組み合わせた数の変化

身体の正中線に沿って肘を曲げて腕を振り、走ることができるようになったが、図１のようにタイムの短縮は見られなかった。

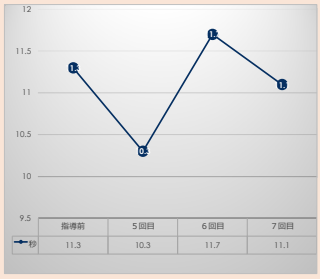


図２ 50m走タイムの変化

## 考察

・一人称視点の模倣を取り入れた教示は、課題が達成しやすくなり、他の課題に取り組む意欲も高まる様子が見られた。
・一つの場所を改善するつもりで動かしても他の部位が不適切な動きを示してしまうことが見られ、動きの全体像をフィードバックする活動を行う必要性がある。